

東日本大震災13年 得



被災地で得た教訓を語る
河村さん(広島市中区で)

「レゴ」で災害備え考える

れら約40人が参加し、ブロック玩具「レゴ」を使い、災害リスクや理想の避難所などを考えた。



中区・多文化共生テーマ 家族連れら議論

東日本大震災の発生13年を控え、多文化共生と災害に強いまちをテーマにした

防災イベントが10日、広島市中区の広島大東千田キャンパスで開かれた。家族連

2018年の西日本豪雨を機に発足した広島大防災・減災研究センターが主催。冒頭の講義で、同大学院の小口悠紀子准教授(日本語教育学)が「外国人は正確な情報を得られず、災害弱者になりやすい」と解説。日本語学校に通う外国人54人への調査で、67%が避難所の場所を知らず、61%が相談できる日本人がいないと回答するなど課題の一端を示した。

その後、参加者はレゴを使ったワークショップに臨み、災害時の心配事や避難所に必要な物などを表現



東日本大震災の犠牲者を悼んで黙とうするカープの選手ら(マツダスタジアムで) 東直哉撮影

津波被害で陸に打ち上げられた船(2011年6月11日、宮城県気仙沼市で) 建物の被害認定を行う県職員ら(1月28日、石川県輪島市で) 川いずれも県提供



し、災害時の備えへの議論を深めた。家族4人で参加した台湾人の黄巧喬さん(45)は「日本語はあまり得意ではないが、避難所の把握や保存食の確保など、普段の準備が大切だと感じた」と笑顔を見せた。

カープ選手ら 試合前に黙とう

広島東洋カープ対中日ド